

## 斎宮大伯皇女の歌についての一試論

原, 槿子

---

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大学院紀要 = Bulletin of graduate studies

(巻 / Volume)

60

(開始ページ / Start Page)

328

(終了ページ / End Page)

318

(発行年 / Year)

2008-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003141>

## 齋宮大伯皇女の歌についての一試論

## はじめに

律令制定後初めての齋王（注1）である大伯皇女は、『万葉集』に六首の歌を残している。それらの歌はすべて、父天武天皇が亡くなった後、謀反の疑いで殺された弟大津皇子に関連した歌である。そして現在に至るまで、大津皇子の話とともに姉大伯皇女の、大津皇子の死への哀傷歌として解釈は定着している。105・106番歌は巻二の相聞として大津皇子の歌群の前にのり、163番歌から166番歌は巻二の挽歌群にある。問題の所在を明確にするために、先ずそれらの歌を題詞を含めて次にあげる。

- 105 大津皇子、竊かに伊勢神宮いせのかむみやに下りて上り来る時に大伯皇女の作らす歌二首  
我が背子を大和へ遣るとさ夜ふけて暁露に我が立ち濡れし
- 106 二人行けど行き過ぎ過ぎ難き秋山をいかにか君がひとり越ゆらむ  
大津皇子の葬せし後に、大伯皇女伊勢の齋宮より京に上る時に作らす歌二首
- 163 神風の伊勢の国にもあらましをなにか来けむ君もあらなくに  
見まく欲り我がする君もあらなくになにか来けむ馬疲るるに
- 164 大津皇子の屍を葛城の二上山に移し葬る時に、大伯皇女の哀傷して作らす歌二首
- 165 うつそみの人なる我や明日よりは二上山を弟いろせと我が見む
- 166 磯の上に生ふるあしびを手折らめど見すべき君がありといはなくに

人文科学研究科 日本文学専攻  
博士後期課程二年 原 榎 子

105、106番歌は、齋宮として伊勢にいる大伯皇女を、はるばる伊勢まで尋ねてきた弟の大津皇子が、京に帰るのを見送った時の歌。また163、164番歌は、父である天武天皇が崩御し、齋宮の任が解かれて、帰京の途次、その時にはすでに処刑された弟の大津皇子を思つて詠んだ歌。また165、166番歌は、大津皇子の屍が二上山に移葬された時の歌ということに先学の諸説も落ち着いている。どの歌も愛する人（弟）への真情があふれ、その人を失った悲しみが伝わってくる秀歌である。しかしこれらの歌を考えた時、いくつかの疑問が浮かぶ。まず105、106番歌については、既述のように大津皇子が姉の大伯皇女を尋ねて伊勢までやつてきた時の歌とされている。確かに題詞通りにこの歌をとらえた時にはそうなるが、それでは何故105・106番歌は相聞歌として、大津皇子の歌群の前に置かれているのか。また齋宮大伯皇女は、天武三年（六七四）に齋宮として伊勢に赴き、朱鳥元年（六八六）十一月に帰京するが、その間大津皇子が姉の大伯皇女を尋ねてきたのはいつなのか。そしてまた、105番歌の類歌ともいえる歌を105・106番歌と関連づけた時、これらの歌は今までのとらえ方と同じでよいのか等さまざま問題が想起されてくる。そこで本論ではこうした問題を根底におきながら、大伯皇女のこれらの歌が長い年月をこえても私たちの胸を打つのはなぜなのか、105・106番歌を中心に据えて、「歴史」として後世において捉えられてきたものと、文学の生成の接点についての、一つの試論を提起したい。

## 一 齋宮大伯皇女

大伯皇女は、史料には、

七年甲辰、御船到于大伯海。時太田姫皇女産女焉。仍名是女曰大  
皇女。

『日本書紀』齊明天皇七年

とあり、齊明天皇が百濟救援のために西征の途に上ったその途上の、吉備の大  
海軍団の中で生まれた。西暦でいえば、六六一年のことであった。父親は大  
人皇子、母親は天智天皇の娘の大田皇女である。大田皇女は鷗野皇女、後の持統  
天皇の同母姉である。天武二年（六七三年）大伯皇女は齋宮に定められる。史料  
類には、

夏四月丙辰朔己巳、欲遣侍大來皇女于天照大神宮、而令居泊瀬齋宮。  
是先潔身、稍近神之所也。

『日本書紀』天武天皇二年

天武天皇白鳳元年四月十四日、以大來皇女獻伊勢神宮。依合戰願也。  
『年中行事秘抄』「伊勢齋宮事」

とあり、また平安末期成立の『扶桑略記』にも、

天武天皇二年四月十四日、以大來皇女獻伊勢神宮。始為齋王。依合  
戰願也。

とあって、大伯皇女が齋王として伊勢神宮に仕えることになったのは、壬申の乱  
の際に、天皇が勝利を伊勢大神に祈願して、その願がかなえられたことによる為  
だとされている。

また壬申の乱の記事には、

丙戌、且於朝明郡迹太川辺、望拜天照大神。

『日本書紀』天武天皇元年六月

とあり、また『万葉集』巻二、「高市皇子尊の城上の齋宮の時柿本人麻呂の作る歌  
一首（199）」の長歌の一部に、

渡會の齋の宮ゆ 神風にい吹き惑はし 天雲を 日の目も見せず 常闇に覆ひ  
給ひて定めてし 瑞穂の國を

とあって、やはり大海人皇子方の勝利は、伊勢大神の助けによったものであると

歌われている。これらの『日本書紀』や『万葉集』など一連の記載から、大海人  
皇子方の勝利は伊勢の神の助けによるものであり、その御礼として皇女を齋宮と  
してさしあげたということになる。『大神宮諸雜事記』には、

白鳳二年壬申太政大臣大伴皇子企謀反擬奉誤天皇。干時天皇之御内  
心仁伊勢太神宮令祈申給。必合戰之間令勝御。前以皇子天皇太神宮  
御杖代可令齋進之由、御祈禱有感應。彼合戰之日。天皇勝御世利。

『群書類從』第一輯

と載る（注2）。

大伯皇女が齋宮になる以前にも、『日本書紀』や『古事記』、その他『齋宮記』  
（注3）等によると、崇神天皇の代の豊鍬入姫命や、次の垂仁天皇の代の倭姫命  
から用明天皇の酢香手姫皇女まで、伝説上の齋宮を含めて九人の齋宮の名が残っ  
ている。用明天皇の代以降は、齋宮の記録はなく、その後記録にあらわれるのが、  
大伯皇女である。

『日本書紀』にそつて、天武朝の大伯皇女に至るまでの齋王卜定の記事をあげ  
ていくと次の通りである。

○ 景行天皇二十年春二月辛巳朔甲申、遣五百野皇女、令祭天照大神。

○ 雄略天皇元年春三月庚戌朔壬子、（中略）是月、立三妃。元妃葛城園大臣  
女曰韓媛。生白髮武廣國押稚日本根子天皇与稚足姫皇女。是皇女侍  
伊勢大神祠。

○ 繼体天皇元年三月癸酉納八妃。（中略）次息長眞手王女曰麻績娘子。生  
荳角皇女。是侍伊勢大神祠。

○ 欽明天皇二年春三月、納五妃。（中略）次蘇我大臣稻目宿禰女曰堅塩媛。  
生二七男六女。其一曰大兄皇子、是為橘豐日尊。其二曰磐隈皇女。

初侍祀於伊勢大神。後坐軒皇子茨城解。

○ 敏達天皇七年春三月戊辰朔壬申、以菟道皇女、侍伊勢祠。即軒池邊皇  
子。事顯而解。

○ 九月甲寅戌午、天皇即天皇位。（中略）壬申、詔曰、云々。以酢香手姫皇女、  
拜伊勢神宮、奉日神祀。

（用明天皇。即位前紀）

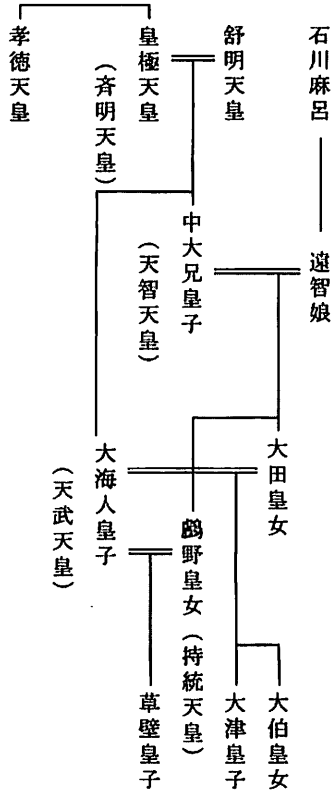
この他『齋宮記』によると、仲哀天皇の御代に伊和志眞皇女が齋王になつてい  
る。

これらの記事を見て気づくことは、「齋」という字は一例も使われておらず、「祭」「侍」「拜」であり、また神の名も「天照大神」「伊勢大神」「日神」と統一性が無い。これらの諸点に、伊勢神宮の成立、また伊勢の神と大和の神の融合の過程などを想起することができる。

壬申の乱の後、大和王権の東国地方への支配の拡大の為に、伊勢神宮・天照大神の重要性が高まっていく。天武朝の王権の拡大・定着と伊勢神宮の成立・発展は深く関係づけられている(注4)。また天武朝の記紀の編纂、皇女を遣わしての齋宮制度の復活、国家的祭祀の体系化は、天武天皇の絶対性を顕現するものであった。大伯皇女の齋宮卜定は、そうした時代の王権の要請の中で行われたのである。

天武天皇には、大伯皇女・大津皇子のほかに皇后鸕野皇女所生の草壁皇子もあり、『日本書紀』によれば、皇子十人、皇女七人あわせて、十七人の皇子女がいた。しかし多くの皇女がいる中で、なぜ大伯皇女が齋王として選ばれたのか。後の歴史的事実を踏まえてそれを考えてみた時、いくつかの理由が考えられる。

次の系図は『日本書紀』により作成した、大伯皇女周辺の関係系図である。



この図に示すように、天武天皇の後であり、後に持統天皇となる鸕野皇女には実子の草壁皇子がいる。大津皇子は鸕野皇女にとってみて、実姉である大田皇女の忘れ形見であり、近い将来において、我が子草壁皇子の競争者として、脅威になるに違いない存在である。その大津皇子の力をそぐ為、同母姉の大伯皇女を齋王として京から遠ざけたとも考えられる。また前述のように、天武天皇には皇

女が七人いたが、その母親たちの后妃としての身分は、大伯皇女の母は妃であるが、それ以外の母親は夫人という身分である(注5)。大伯皇女は、大友皇子の妃となった十市皇女の次に生まれた皇女でもあり、母の大田皇女は早くして亡くなった為に、妃であるが、同母妹の鸕野皇女は皇后になっており、大田皇女が生きていれば大田皇女が皇后になったかも知れない。そういう母の身分からいうと大伯皇女は、皇女としての位置は高く、その身分の高さで齋王に選ばれたとも考えられる。

柿本人麻呂に「渡會の齋の宮ゆ 神風にい吹き感はし」と歌われ、天照大神の重要性、換言すれば伊勢神宮の重要性が高まり、天皇を神と位置づけようとする思想が起こってきつつある時代において、「齋宮」という立場は重要な立場であった、前述のように大津皇子の力をそぐ為、大伯皇女を京から遠ざける必要の為に齋宮の任につかせたとは考えにくい。

冬十月丁丑朔乙酉、大来皇女自泊瀬齋宮向伊勢神宮。

〔日本書紀〕

天武三年(六七四)十月九日大伯皇女は泊瀬の齋宮から伊勢神宮に向かつていく。時に十四歳であった。この泊瀬の齋宮とは、

夏四月丙辰朔己巳、欲遣侍大来皇女于天照大神宮、而令居泊瀬齋宮。是先潔身、稍近神之所也。

〔日本書紀〕天武天皇下二年

とある。後に『延喜式』の規定に、「野宮」という清浄な場が設定され、そこで齋宮は一年間潔齋の生活を送り、その後伊勢神宮に旅立つのであるが、その「野宮」と同じ趣旨の清浄な場と思われる(注6)。また「泊瀬」にその場を求めたということも意味深い。「泊瀬」といえば伊勢街道の出発点でもあるが、「泊瀬朝倉宮」に天の下しらしめし天皇・大泊瀬稚武天皇」といわれた雄略天皇に關係する地名である。大和朝廷による統一国家を成し遂げたといわれる五世紀後半の英雄的な君主であり、倭の五王の武であるともいわれる、雄略天皇その人の、謂われの地から伊勢に向かつて出発するというのも、天武天皇の王権の権威付けを考えたことであろう。

次に大伯皇女の弟大津皇子についてみると、大伯皇女と大津皇子との年齢は二歳違いである。『懷風藻』には、

皇子者。淨御原帝之長子也（注7）。状貌魁梧。器宇峻遠。幼年好學。博覽而能屬文。及壯愛武。多力而能擊劍。性頗放蕩。不拘法度。降節禮士。由是人多託。

と記され、『日本書紀』には、

庚午、賜死皇子大津於詠語田舎。時年二十四。妃皇女山辺被髮徒跣、奔赴殉焉。見者皆歎歎。皇子大津、天淳中原源真人天皇第三子也。容止牆岸、音辞俊朗。為天命開別天皇。所愛。及長辨有才學、尤愛文筆。

詩賦興自大津始也。

（持統天皇 稱制前紀・十月）

とある。これらの記事から察するに、大津皇子は、「身体が大きいたくましく、容貌はすぐれ、言葉つきも美しく、人品も高く深く、幼い時から学問をして、成長してからは武術にもたけた魅力的な皇子だった。」ということになる。また「性質がさっぱりしていて、節を重んじる」大津皇子の人柄は、宮廷の中で多くの人々を惹き付け、その存在は衆目的であった。また祖父にあたる天智天皇に愛され、また天皇の娘山辺皇女を妻にしていた。吉永登は『万葉文学と歴史のあいだ』で「天智天皇に愛されたことや天皇の女山辺皇女を妻にしていることはそのすぐれた才能とともに天智残存勢力もしくは、反天武勢力に利用されやすい立場におかれていた。」と述べているが（注8）、事実この大津皇子は父の天武天皇が崩御して、一ヶ月もたたないうちに、謀反を企てたという理由で捕らえられ、謀反発覚の翌日には、早くも死を賜っている。そしてそれから一ヶ月後、大伯皇女は京に帰ってくる。『日本書紀』には、

十一月丁酉朔壬子、奉伊勢神祠皇女大来、還至京師。

とある。斎王の任を解かれて京に帰ってくる理由を、弟大津皇子の刑死によると捉える考え方もあるが（注9）、天武天皇の崩御が九月九日、弟大津の死が十月三日、大伯皇女が京に帰ってきたのが十一月十六日ということを見ると、退下の準備など時間的にもかかるはずで、ここはやはり、父天武天皇の崩御による退下とみておく。朱鳥元年（六八六）十一月、大伯皇女二十六歳であった。それ以後の大伯皇女は消息は伝わっておらず、ただ記録には薨伝だけが知れるばかりである。

大寶元年十二月乙丑 大伯内親王薨 天武天皇之皇女也。 『続日本紀』  
時に四十一歳であった。

## 二 105番歌の詞書き「竊かに」・「わが背子」について

105 大津皇子、竊かに伊勢神宮に下りて上り来る時に、大伯皇女の作らす歌二首  
我が背子を大和へ遣るとさ夜ふけて暁露に我が立ち濡れし  
〔吾勢祐乎 倭辺遣登 佐夜深而 鷄鳴露尔 吾立所濡之〕

この105番歌の読み方については、新編日本古典文学全集本・日本古典文学大系本・新潮日本古典集成本それぞれの『萬葉集』、また『萬葉集注釋』・『萬葉集釋注』・『萬葉集全注』などの注釈書の読み方に異同はない。訳も、「大津皇子がひそかに伊勢神宮に下り、帰って来る時に、大伯皇女が作られた歌二首。あの人を大和に帰し見送ろうとして 夜も更けて 暁の露に わたしは立ち濡れたことよ。」（『新編日本古典文学全集』）と、とっており、他の注釈書もほぼ同様である。作歌時期については、「竊かに」という語句から、次のように様々に取り沙汰されている。

- 1 禁忌を侵したことを背景に置く言葉。天武の忌中に國家の守護神に勝手に参ることは禁忌を侵すことであった。この伊勢下向は九月二十四日夜半から二六日朝までのことであつたらしい。 『新潮日本古典集成』
- 2 万葉集の題詞、左注でこの字（竊かに）を用いてある場合、必ず男女の秘事に関する記述が見られる。（中略） 九月九日天武崩御、同二十四日大津謀反、十月二日逮捕、翌三日処刑、とある。この伊勢下向はその九日間のことで、この歌が詠まれたのは恐らく九月三十日未明、月のないアカトキであつたろう。 『新編日本古典文学全集』
- 3 大津皇子の訪問をうけられたのであり、その事実不明であるが「竊かに下る」とあつて、皇子御謀反の直前の事かと思はれる。 『萬葉集注釋』
- 4 禁忌を侵したことを背景に置く言葉。皇室の祖神を祭る伊勢神宮に参るには勅許を必要とした。大津皇子が「竊かに伊勢神宮に下」つたのは、朱鳥元年（六八六）九月二十四日夜半から二十六日朝までのことであつたらしい。父天武が没して十五日目、忌中のことである。國家の守護神である伊勢の神宮に勝手に参ることは当時禁じられていた。大津皇子はその禁忌を犯して伊勢

神宮に赴いた。事はそれだけで反乱になる。(中略)伊勢神宮を味方にいれるのが、大津伊勢下向の目的であったと思われる。伊勢神宮の加護を頂くものは正当の者であるから、それだけで、反乱は有利に展開されることになる。

〔萬葉集釋注〕

5 清御原宮のあった飛鳥から伊勢まで約一〇〇キロメートル。徒歩で往復五日のみちのりであるという。また神堀忍「大伯皇女と大津皇子」(万葉五四号)は、草壁皇太子とともに国政に参画していた大津皇子だから、人目を忍ぶのも難しく、おそらく迂回路を通ったのではないかと推定し、吉野を経て伊勢へ向かう一〇〇キロを馬で往復したと想像している。朝早く飛鳥を立つと夕方には伊勢に着く計算になるようだ。姉弟の間で何が語られたか明らかでないが、弟の不意の訪問が皇女を驚かせ、不安を抱かせたであろう。

〔萬葉集全注〕

「竊かに」という語の意味は『日本国語大辞典』によると、人に知られないようにするさま。人に見聞きされないようにするさま。

であつて、「密かに」、「秘かに」の意味とほぼ同じであるが、「竊かに」と書いた時、『万葉集』中、105番歌以外の用例は六例のみである(注10)。

【用例】を示すと次の通りである。

90 君が行き日長くなりぬやまたづの迎へを行かむ待つには待たじ

(左注)

(前略) 木梨軽皇子を太子となす。容姿佳麗にして、見る者、自に感でつ。

同母妹軽太娘皇女もまた艶妙し云々。遂に竊かに通けぬ。

(題詞) 大津皇子、竊かに石川女郎に婚ふ時に、津守連通その事を占へ露はすに、皇子の作らす歌一首

109 大船の津守が占に告らむとはまさしに知りてわが二人寝し

(題詞) 但馬皇女、高市皇子の宮に在す時に、竊かに穂積皇子に接ひ、事既に形はれて作らす歌一首

116 人事を繁み言痛み己が世にいまだ渡らぬ朝川渡る

2470 湊に さ根延ふ小昔 ぬすまはず (不竊隠) 君に恋ひつつ ありかっ

ましじ

(河口に根をはっている小昔のようには、ひっそりと人目を忍んでおれず、

あなたが恋しくて生きていられそうにありません。)

2573 心さへ奉れる君に何をかも 言はずて言ひしと 我がぬすまはむ

(吾將竊食)

(心まで捧げたあなたに何をいいたい言わないのに言ったなどと、私は嘘を申しましようか。)

2832 山川に 筈を伏せて 守りもあへず 年の八年を 我がぬすまひし

(吾竊儻師)

右の一首、魚に寄せて思ひを喩へたるなり。

(山川に筈を仕掛けて番をしきれないので八年間わたしはくすねてやった) これらの例歌を見ていった時、『新編日本古典文学全集』の頭註で、すでに述べられているように、「すべて男女の秘事に関する場合」に用いられている。すると105番歌だけが、「こっそりと伊勢神宮に仕える姉のもとに弟が尋ねた。」あるいは、「謀反の相談をするために」、あるいは、「別れを告げにこっそり姉のもとを訪れた。」とするのには無理がある。

そのように考えた時、105番歌に歌われている「わが背子を(吾勢帖乎)」という語句も気になる。「わが背子」について、『古語大辞典』や『時代別国語大辞典(上代編)』(注11)で整理しておく。

せ(背・兄・夫)「せ」は女性から兄・弟・夫・愛人など、または他の男性を親しんで呼ぶ語。ほとんどが妻から夫に対して言い、ワガセコとして現れる事が多い。また姉や妹から兄や弟を呼ぶ語であった。

この「姉や妹から兄や弟を呼ぶ」時に用いる「背子」について考えた時、三谷栄一は『記紀万葉集の世界』で「未開社会における同母の兄弟姉妹間の結婚の風習が、古く日本にもあったことを示している」ととらえている(注12)。奈良時代、異母兄妹の結婚は認められているというのが通説ではあるが、同母兄妹の場合も、古代においては認められていたというのである。

また、「わが背子」は、まれには男性から男性に対して用いられたり、女性から夫や兄弟以外の男性に対して用いられる場合もある。

こ 親愛の情を表す接尾語

せこ 女が兄弟、恋人、夫など男を親しんで呼ぶ語。

となる。恋人や夫を呼ぶ用例は、どの辞書にも様々にあるが、姉から弟を呼ぶと

いう用例については必ずこの105番歌があげられ、それ以外の用例は見あたらない。また、男性から男性に対して「わがせこ」と用いることは、まれでは無く、一般的に用いられている。『萬葉集索引』や『萬葉集各句索引』をもとに「わがせこ」と使われているものをまとめてみると、次の通りである。

わがせこが	我背子之・吾背子之・吾背子我等	五三例
わがせこし	吾背子師・和我勢故之・和我世故之	三例
わがせこと	吾背子與・吾背兒与・和我勢故等	三例
わがせこに	吾背子・吾勢子・我背兒等	一二例
わがせこは	吾背子者・我兄子者・我勢古波等	一三例
わがせこを	吾勢祐乎・吾背子乎・我背兒乎等	一四例

ここに示した九八例のすべてにあたって分類してみると、

A 恋(夫・恋人への思い・女に頼まれて詠んだ歌も含む。) 六九首

【用例】

2841 我が背子が朝明の姿よく見ずて今日の間を 恋ひ暮らすかも

3121 我が背子が使ひを待つと笠も着ず出でつつそ見し雨の降らくに

43 我が背子はいづく行くらむ沖つ藻の名張の山を今日か越ゆるむ (2681重出) (511に重出)

B 男同士(宴・挨拶等) 二三首

【用例】

4259 十月しぐれの常か我が背子がやどのもみち葉散りぬべく見ゆ 家持

268 我が背子が古家の里の明日香には千鳥鳴くなり夫待ちかねて 長屋王

4077 我が背子が古き垣内の桜花いまだ含めり一目見に来ぬ

C その他 六首

この、その他というのは叔母が娘と家持を結婚させたくて家持にあてて詠んだ歌や、七夕の歌であり、それは織女星の立場で詠んだ歌などであって、「わがせこ」と用いた時、『万葉集』中、弟への歌は105番歌以外は一例もない。とすると、ここにおいても本当に105番歌は、「弟大津皇子を見送った姉としての歌」とい

えるのであろうか。

三 「遣る」・「曉露」・「立ち濡る」・「秋山」について

「遣る」は普通「遠方へ行かせる。派遣する。」の意味で用いられるが、どうなつてしまふかわからない時に使われるようである。伊藤博は『萬葉集積注』で「行かせたくないけれども、あえて行かせる意」ととり、稲岡耕二は『萬葉集全注』で「手放したくないのに行かせてしまふ意味が強い。これも、大和へ帰したくないのに行かせるという気持ちがかめられている。」とみている。『新編日本古典文学全集』の頭註では「行かせる。強制的語気が感じられ、また見送る側の惜別の情も認められる。」と述べて、いづれもただ「派遣する」や、「行かせる」ではなく、「行かさざるを得ない状態、またその結果が不安な状態」の時に用いられるとらえている。『万葉集』では「遣る」の用例は三八例であり、そのうち「やまとへやると・やまとへやりて」はこの105番歌と3363番歌の二例が載る。

3363 我が背子を大和へ遣りてまつしだす 足柄山の杉の木の間か (巻第十四)

(あの方を、大和に送り出してまつしだす足柄山の杉の木の間よ)  
この歌の場合は、たぶん夫に対しての歌であろう。夫が調庸の運脚として上京させられるのであろうか、または中央官庁の雑役である仕丁や衛士として徴発されたのであろうか。三年という任期の期限が一応あるとはいえ、いつ帰れるかわからない夫を見送る妻の思いがよく表れている。「愛しい男を見送る女の情」としては、105番歌と大変よく似た情感が描かれている。

曉露(鶏鳴露)は 夜明け方に置く露をいい、後朝の涙の意に掛けることが多い。また消えやすくはかない身の比喻として露を詠むことも多い。しかし、『万葉集』での「曉露」の用例は四例だけで、105番歌以外すべて、「曉露」が萩を色づかせる意に用いられている。その意味ではこの105番歌は異例ともいえる。

【用例】

105 わが背子を大和へ遣るとき夜ふけて曉露に我が立ち濡れし 大伯皇女

1605 高円の野辺の秋萩このころの 曉露に咲きにけむかも 家持

2182 このころの曉露に我がやどの 萩の下葉は色付きにけり

2213 このころの曉露に我がやどの 秋の萩原色づきにけり

105番歌の、「わが背子」「夜ふけて」「曉露」「立ち濡れし」の語の配列を考えた時、まさに男女の後朝の歌の情感が溢れている。しかし、この歌はそれだけではなく、「曉露」から萩への連想につながり、「秋」を導きだしていると考えられる。この105番歌に続く、106番歌はまさに、

106 二人いけど行き過ぎ難き秋山をいかにか君がひとり越ゆらむ

と歌われており、季節が秋ということがわかるが、するとこの105・106番歌の作歌時期はいつなのであろうか。前章の「竊かに」の項で前掲したように、

1 この伊勢下向は九月二四日夜半から二六日朝までのこと。

『新潮日本古典集成』

2 朱鳥元年(六八六)九月二十四日夜半から二十六日朝までのことであつたら

しい。父天武が没して十五日目、忌中のことである。

『萬葉集釋注』

と、『新潮日本古典集成』も『萬葉集釋注』も秋九月の二十四日のこととみている。

確かに暦の上では秋であり、矛盾はなさそうであるが、天武天皇の崩御は朱鳥元年(六八六)九月九日で、同九月二十四日には「当是時、大津皇子謀反於皇太子。」と『日本書紀』にのる。また十月二日には「皇子大津の謀反が発覚。翌三日、皇子大津詔語田の家で死を賜る。(二十四歳)」とある。丁度秋から冬にかけての出来事であつた。しかし、天皇崩御後の『日本書紀』の記事を読むと、毎日のように「殯を行い、哀の礼を奉る」とあつて(注13)、たとえ馬を飛ばして伊勢に行つたとしても、往復二日はかかり、天皇が崩御して、その殯の期間にたとえ二日であっても、「朝政を聴く」立場(注14)の大津皇子が京を留守にすることは無理があつたと思われる。105・106番歌は、大伯皇女その人が大津皇子を見送つた時に作つたとしても、そして大津皇子が実際に大伯皇女を伊勢に訪ねたことがあつたとしても、それは天武天皇在世中の、ある秋の日に弟大津皇子の訪れがあつた、と考えたほうが自然である。

また「曉露」ではないが、「露」によく似た、しづく(雫)の歌が105・106番歌に続いて107番歌にのる。そのしづく(雫)の用例は『万葉集』中三例だけである。

大津皇子、石川郎女に贈る御歌一首

107 あしひきの山のしづくに妹待つとわれ立ち濡れぬ山のしづくに

石川郎女、和へ奉る歌一首

108 我を待つと君が濡れけむあしひきの山のしづくにならましものを

4225 あしひきの山の黄葉にしづくあひて散らむ山路を君が越えまく 家持

これらの三首の中で、107番歌は大津皇子の歌であり、普通は訪れるのは男であり、「女の訪れを待つ男」、というのは珍しい。家ではなく人目を忍んでどこかで逢い引きをして、なかなか来ない女を待つての歌なのであろう。しかし、この107番歌を読む時、立っているのが男と女の違いがあるにせよ、前掲の105番歌とその情景が非常によく似ていることに気づく。また、「立ち濡る」の用例を調べてみると、次の三例だけである。

105 わが背子を大和へ遣るとき夜ふけて曉露にわが立ち濡れし 大伯皇女

107 あしひきの山のしづくに妹待つとわれ立ち濡れぬ山のしづくに 大津皇子

1096 衣手の名木の川辺を春雨に我立ち濡ると家思ふらむか

105・107番歌を比較してみると、「背子」に対して「妹」・「曉露」に対して「しづく」の違いはあるものの、「わが立ち濡れし」「われ立ち濡れぬ」と、既述したように情景が大変よく似ている。105番歌は「女が男を見送つて露に濡れて立っている。」であり、107番歌は「男が女を待つてしづくに濡れて立っている。」ということである。この類似性の意味することを考えた時、105・107番歌がひとまとまりの話を作り上げているということに気づく。また106番歌

106 二人いけど行き過ぎ難き秋山をいかにか君がひとり越ゆらむ

に目を向けた時、「柿本朝臣人麻呂、妻が死にし後に、泣血哀慟して作る歌」という題詞の、

208 秋山の黄葉を繁み惑ひぬる妹を求めむ山道知らずも

に思い到る。『新編日本古典文学全集』頭注では「山中に葬つてきた妻を、自ら迷い込んで里へ下りてくる道が分からないような表現にした。」ととり、伊藤博は『萬葉集釋注一』(集英社文庫)で「秋山いっばいに色づいた草木が茂っている中で中に迷いこんでしまったとおし子、あの子を探し求めようにもその道さえわからない」と訳して、「妻はいない。その嘆きを、妻が黄葉の山へ迷いこんだ形であつたのがこの一首である。」と注釈している。またこの208番歌以外にも、「人



の死後その靈魂が山に入るといふ思想で秋山が歌われている歌「あるいは「秋山に踏み込んで戻らない人を忘れられない歌」をあげることができる。

1409 秋山の黄葉あはれとうらぶれて入りにし妹は待てど来まさず

2243 秋山に霜降り覆ひ木の葉散り年は行くとも我忘れめや

これらの「秋山」と、106番歌の「秋山」を同じ意味、「死出の意味・死との関連」では読めないだろうか。

#### 四 105番歌と3363番歌の類似性

もう一度105番歌の「わが背子を大和へ遣ると」と、3363番歌の「我が背子を大和へ遣りて」を見てみたい。

105 わが背子を大和へ遣るとき夜ふけて暁露にわが立ち濡れし

3363 我が背子を大和へ遣りてまつしだす足柄山の杉の木の間か

「行かせたくないのに大和へ行かせざるを得ない男・夫を見送ったたずむ女」、その女の情感が、二つの歌に共通して強く表れている。『万葉集』の中で「わが背子を大和へ遣る」という語の用例は、この二例だけであるが、この二例共に《山を越えていく男》を見送る女の歌でもある。《山を越えていく男》を考えた時、『万葉集』中では「君が山路越ゆらむ」と実に多く歌われている。

43 わが背子はいづく行くらむおくつもの名張の山を今日か越ゆらむ

1666 朝霧に濡れにし衣干さずしてひとりか君が山路越ゆらむ

1681 後れ居て我が恋ひ居れば白雲のたなびく山を今日か越ゆらむ

1730 山科の岩田の小野のははそ原見つつか君が山道越ゆらむ

3192 草陰の荒蘭の咲きの笠島を見つつか君が山路越ゆらむ

3193 玉かつま島熊山の夕暮れにひとりか君が山路越ゆらむ

4225 あしひきの山の黄葉にしづくあひて散らむ山路を君が越えまく 家持

これらの歌を読む時、後の『伊勢物語』二三段の歌、

風吹けば沖つしら浪たつた山夜半にや君がひとりこゆらむ

という、女が、「山を越えて行く男を見送る話」までが思い出される。これらを合わせ考えた時、《山を越えていく男を見送る女》の話が古代から連綿としてあったのではないかと考えさせられる。

#### 五 105・106番歌と大津皇子物語

今まで述べてきたように、「大津皇子、竊かに伊勢神宮に下りて上り来る時に大津皇子の作らず歌二首」の題詞で105・106番歌は始まり、次の歌107・109までは大津皇子と石川郎女の贈答またそれに関連した歌である。その後の110番歌は大津皇子の異母兄であり、皇位継承争いの、政敵でもある草壁皇子が、自分を捨てて大津皇子にあり石川郎女をなんとか引き留めようとしてよんだ歌である(注15)。兩海博洋編『歌語り・歌物語辞典』万葉集(第二期)では、

大津皇子の謀反事件(六八六)は当時の人々におおきな衝撃を与えた。将来を囑望された有為な若者の衝撃的な死であるだけに、その事件は早くから物語化されて語られたと思われる。卷二相聞に載す大津皇子関係の一連の歌は、その物語の一部である可能性が高い。

と大津皇子物語としてみている。また『萬葉集釋注一』で伊藤博は「一〇五の歌からこの歌まで、大津皇子謀反事件を背景に置く男女の物語という、首尾一貫する筋を持つというべきで」と述べて、薨去順による歌の配列を論じた上で、「物語性に対する興味も重んじた」と見ている。更に、

歌の上では、罪人が勝利に終わったような歌群(一〇五〜一〇)を、草壁皇子の娘である元正女帝の時代に編んだ歌巻が、大津皇子を死に追いやった持統朝の相聞歌群の冒頭に堂々と押し立てているのは、不審といえれば不審である。これは崇りをおそれての鎮魂の行為と認められる。

と述べている。確かに処刑されるといふ衝撃的な歴史事実があり、何度もみてきたように姉の大伯皇女は、律令制になって初めての斎宮という、神に仕える女性である。悲劇的な生涯を終えた姉弟の話は十分物語化されうる条件を備えている。品田悦一は、「この六首の歌が物語的に編成されていることは多くの論者が一致して認めるところである。」として、論文を紹介の上、石川郎女をめぐる大津と草壁の恋愛を述べて、「一〇五、一〇六歌と大津皇子関係の四首をつないで読むと、謀反事件の遠因はこの三角関係にあったとの筋書きがうかびあがってくる。」と述べ、更に「恋の鞘当てからクーデターに走るなど、もちろん史実ではありえない。六首の編成は事件が物語化されたことを意味するはず」と続けている(注16)。

今まで述べてきた様々な要素を総合して、105・106番歌についての一つの解釈を導き出したと思う。

## 六 結

まず105番歌については、もしこれを通説通りに大伯皇女の作歌とするならば、今まで言われていたように、大津皇子が謀反の疑いで殺される寸前に姉に別れに来た時の歌、あるいは謀反の相談に来た時の歌ではなく、もつと早い時期、天武天皇が在世中の、もちろん姉大伯皇女が齋宮在任中の秋のある時に、弟大津皇子が伊勢に訪れた時の歌と見るべきである。しかし、そう思うのは題詞の「大津皇子、竊かに伊勢神宮に下りて上り来る時に大伯皇女の作らす歌」とあることを前提に考えたのであって、筑紫甲真がいうように(注4参照)、天皇の祖先神・アマテラスを祭る伊勢神宮が文武天皇の頃に成立するのであれば、この105番歌の題詞は『万葉集』の編者の創作ということになる。確かに『日本書紀』にも一度目を向けると、「奉<sub>二</sub>伊勢神祠<sub>一</sub>皇女大来、還至<sub>二</sub>京師<sub>一</sub>。」と書かれていて「伊勢神祠・「祠」とある。題詞を編者の創作と考えた時、歌そのものも別の場所、別の人の手によって詠まれたものとも考えられる。あるいは虚構の中で詠まれたものが、大津皇子が謀反の疑いを得て処刑という、非業の死をとげたことによって、その歴史の結末を知る『万葉集』の編者によって、意図的にこの箇所位置されたとも考えられる。また、前述してきたように、105番歌はどうみても姉が弟を見送る歌とは読めない。兄妹への愛ではなく、男と女の愛、相聞である。題詞がなければ、大伯皇女の同母弟大津皇子への歌とは思わず、恋する者の、あるいは夫婦の歌として読むに違いない。しかし何故、同母兄妹である、大伯皇女の歌がこのように夫婦のような歌として大津皇子歌群の前に載ったのかを考えてみた時、三谷栄一が、「兄妹婚やそれと推定される物語には、反逆・反乱が色濃くつきまといっている。」と述べているように(注12参照)、古代においては異母兄妹だけではなく、同母兄妹婚も許されていた。しかし、時代が下がるにつれて、次第にタブー視されるようになり、105番歌が配列された時は禁忌としてとらえられていたのではないだろうか。それが「竊かに」の語にもなり、歌の情感が男女の情を歌っているかのような歌になったのではないか。これは90番にのる軽太

子と軽太郎女の「遂に竊かに通けぬ。」の語とともに禁忌の恋・兄妹婚を読む人にイメージさせる。『古事記』『日本書紀』の伝える所は、捕らえられ流されたのが軽太子、あるいは軽太郎女とそれぞれ違うが、どちらにしても一方は流され、また一方は悲劇的な死をあげている(注17)。この軽太子と軽太郎女の話においてもト者が二人の関係を露見させているが、大津皇子の歌も、

109 大船の津守が占に告らむとはまさしに知りて我が二人寝し

と石川郎女との関係は占によって露わにされている。これらの類似をみてみると、大伯皇女・大津皇子・石川郎女の三者の立場や状況、また歌をも混然と融合させて、一つの物語にまとめ上げたものと思われる。しかし大伯皇女は伊勢神に奉仕する齋宮であり、流されることもなく任を全うしている。そこで、105番歌はあくまでも弟を思う姉の歌として定着していく。大伯皇女と大津皇子の関係は、古代のヤマトヒメ、ヤマトタケル。あるいは軽太子と軽郎女の話が下敷きに置かれて配置された。前述したように、弟を心配する姉の歌として、秀歌と思いつつ、あえて私は大伯皇女ではない別の人が詠んだのではないかと提起してみたい。だが詠んだか分からないままでもよい。あるいは、このとき石川郎女がどこに住んでいたのかは分からないが、石川郎女が大津皇子に詠みかけ、その返歌が、

107 あしひきの山のしづくに妹待つと我たち濡れぬ山のしづくに

ではなかったか。そんな風に考えてみることも可能であろう。そのように見たと、106番歌は本来なら163番歌の前に来るべき歌とも思われる。大津皇子の死を知った時、「秋山」と死者の国への連想で歌っていると考えてみたい。

大津皇子も大伯皇女も、天皇の子として生まれ、一方は聡明で皇位継承のすぐ側に位置していながら、それだけに危険視されて謀反の疑いをかけられて殺されてしまう。一方は律令制初の齋宮として伊勢神宮に奉仕する。この姉弟は特に草壁皇子、持統天皇側からは危険視されていた。この二人の劇的な一生は、『万葉集』を読む人々の心に、哀情と哀切の心を起こしたに違いない。軽皇子と同母妹軽太郎皇女との悲恋や、『古事記』に載る齋王倭姫と悲劇の皇子倭建の話をも彷彿とさせて、『万葉集』の編集時に歌の配置なども考慮されて、今の様に定着したのである。

大津皇子亡き後、皇位を争った草壁皇子は皇太子のまま亡くなり、その後大津皇子は二上山に移葬される。二上山への移葬は、大津皇子の祟りを恐れての鎮魂

と、荒ぶる魂を封じ込める処置と思われるが、二上山をめぐる街道は交通の要路でもあり、人々がいつも振り仰ぐその頂に何故移葬されたのか、疑問は解けない。しかしこれら六首の歌が『万葉集』に収められた頃には、大伯皇女と大津皇子姉弟の、悲劇的な話は、すでに物語化され、評価が定着して伝承されていたといえる。あるいは『万葉集』にまとめられることによって、イメージの形成がなされ、物語化されていたと思われる。

注1 「齋王」とは、伊勢大神をまつる未婚の皇族の女性を言い、内親王である場合は齋内親王という。齋王の住まいを「齋宮」といい、または訓読してイツキノミヤという。その齋王の居所たる齋宮から伊勢の齋宮自身を、「齋宮」または「イツキノミヤ」という。後に嵯峨天皇の代から設立される「齋院」と区別してこの論文においても「齋王・大伯皇女」と呼ばず「齋宮・大伯皇女」と呼ぶことにする。

また、記録上の「齋王」の初見は『続日本紀』に、  
 (養老五年) 九月乙卯、天皇御内安殿、遣使供幣帛於伊勢太神宮。以皇太子女井上王<sup>二</sup>為<sup>一</sup>齋内親王<sup>二</sup>。  
 (天平十八年) 九月壬子、先是、見女王為<sup>一</sup>齋王<sup>二</sup>。

と記されている記事である。「齋王」の呼び名はそれ以前には用いられていないが、しかし、「齋王」という職として考えた時、齋王の制は歴代受け継がれてきていて、天武朝の齋王・大伯皇女からは歴史的にもあきらかである。

注2 榎村寛之は『伊勢齋宮と齋王』(稿書房)で「伊勢に入った天武は、伊勢神宮を遙拝した。しかし彼女の派遣は単なる先勝祈願だけではないように思う。本来東国支配を意識して創られたと見られる伊勢神宮に皇女を派遣することは、中央政府と地方豪族に君臨する「天皇」の、最高のデモンストレーションだったと考えられる。その意味で大来は画期的な存在だった。」と述べて(P27)、大伯皇女の伊勢神宮派遣は、先勝祈願に名目を借りた。政治的意味合いでとらえている。

注3 『齋宮記』群書類従第三輯巻第四十四

注4 『アマテラスの誕生』(講談社学術文庫)で筑紫甲真は「天武の没した年から持統十年のころには、まだ皇大神宮は成立していなかった。」ととり、「文武二年十二月に多氣大神を度会郡に移した時が、皇大神宮の誕生の時。」とみている。(P118~119)

注5 次の「天武天皇の后妃と皇子女」の表は『日本書紀』をもとに作成したものである。

后妃名(一)内は父の名	皇子女
后野皇女(天智天皇)	草壁皇子
大田皇女(天智天皇) 薨	大伯皇女(齋宮)・大津皇子
大江皇女(天智天皇)	長皇子 ・弓削皇子
新田部皇女(天智天皇)	舍人皇子
水上娘(藤原鎌足)	但馬皇女(高市皇子妃)
五百重娘(藤原鎌足)	新田部皇子
大鞋娘(藤原赤兄)	穂積皇子・紀皇女・田形皇女(齋宮娘)
額田姫王(鏡王)	十市皇女(大友皇子妃)
尼子娘(胸形君德善)	高市皇子
かち媛娘(夫人臣大麻呂)	忍壁皇子・磯城皇子・泊瀬部皇女(川嶋皇子妃) 託基皇女(齋宮)

注6 「野宮」の起源は明らかではなく、記録での初見は延暦十六年八月甲戌 齋内親王被<sup>二</sup>于葛野川<sup>一</sup>即移入<sup>二</sup>野宮<sup>一</sup> 『日本後紀』である。

注7 大津皇子について、『懐風藻』には「淨御原帝之長子也。」とのり『日本書紀』には「天淳中原瀛真人天皇第三子也。」とのる。

注8 『万葉文学と歴史のあいだ』吉永登著 創元社 (P53)

注9 『日本書紀』新編日本古典文学全集の頭注(三巻四七七ページ頭注一三・二四一ページ頭注三)では「同母弟大津皇子の死によって齋宮を解任。」ととる。

注10 歌の用例の数は、この箇所以外も次に記載する本等によって調査したものである。  
 『萬葉集索引』古典索引刊行会 稿書房  
 『万葉集表記別類句索引』日吉盛幸編 笠間索引叢刊  
 『万葉集歌句漢字総索引』日吉盛幸 桜楓社  
 『萬葉集各句索引』高田昇 桜楓社  
 『国歌大観索引』

注11 『時代別国語大辞典(上代編)』三省堂刊

注12 『記紀万葉集の世界』三谷栄一著 有精堂「十 兄妹の恋」で三谷栄一は、「イザナキとイザナミは、兄と妹との相姦神話であることはすでに日本の神話学者が説かれている」

とだが、(中略)言問はぬ 木すら妹と兄ありとふを、ただ独り子にあるが苦しき(二〇〇七)という歌からみても、この歌が独り子であることを嘆じている以上、確かにイモセは兄妹が本義であったのであろう。」と述べて(p161)、また「ヤマトケルとヤマトヒメとは、記紀では姨、甥の關係となつてゐるものの、その名称から窺えることく、同母のヒメ・ヒコ關係にあるとみてよく、沖繩のオナリ神の信仰といえる。つまり故郷を離れた男子に同母の姉妹の生御魂が始終つきまとい守護してくれる信仰の痕跡が窺えるのである。この場合も、ヒメ・ヒコ關係の濃厚な『古事記』の記載は、なぜかヤマトケルが命に服さず乱暴で西征に追いやられ、東征もまた追放という形をとつてゐることで、その裏面に同母の兄妹の恋と反逆とが隠されているとさえ思われることである。以上揚げてきた著名な兄妹婚やそれと推定される物語には、反逆・反乱が色濃くつきまといつてゐる。(p・169)」として他の兄妹婚の例が挙げられ、「本来の大和朝廷には、同母の彦姫制度的な近親相姦においてのみ、聖なる王権として出現する政治形態があつたといえよう。そうした王権の姿が、律令的な記紀の編纂意識から追放・排除されているのが、現在の我々の読むことのできる神話なのである。」と結論づけている。

注13 朱鳥元年(六八六)九月丙午(九日)天武天皇崩御。

戊申(十一日)哀の礼を奉る。殯宮を建てる。

辛酉(二十四日)南庭で殯を行い、哀の礼を奉る。

当是時、大津皇子謀反於皇太子。

甲子(二十七日)諸々の僧尼が殯の庭で哀の礼を奉つた。

乙丑(二十八日)諸々の僧尼が殯の庭で哀の礼を奉つた。

丙寅(二十九日)諸々の僧尼が哀の礼を奉つた。

丁卯(三十日)諸々の僧尼が哀の礼を奉つた。

十月己巳(二日)皇子大津の謀反が発覚。

庚午(三日)皇子大津詠語田の家で死を賜る。(二十四歳)

十一月壬子(十六日)皇女大伯京に還る。(二十六歳)

『日本書紀』

注14

『日本古代政治史の研究』(岩波書店)で北山茂夫は、大津皇子が朝政を聴くようになつたのは、「大津の抜擢の、しくまれたまふれでないとはいいきれないようだ。」とみている。(P143)

注15

大津皇子、竊かに伊勢神宮に下りて上り来る時に大伯皇女の作らず歌一首

105 我が背子を大和へ遣るとき夜ふけて曉露に我が立ち濡れし

106 二人行けど行き過ぎ難き秋山をいかにか君がひとり越ゆるむ  
大津皇子、石川郎女に贈る御歌一首

107 あしひきの山のしづくに妹待つとわれ立ち濡れぬ山のしづくに  
石川郎女、和へ奉る歌一首

108 我を待つと君が濡れけむあしひきの山のしづくにならましものを  
大津皇子、竊かに石川郎女に婚ふ時に、津守連通がその事を占へ露はすに、皇子の作らず歌一首

109 大船の津守が占に告らむとはまさしに知りて我が二人寝し  
日並皇子尊、石川郎女に贈り賜ふ御歌一首

110 大名児を彼方野辺に刈る草の束の間も我忘れめや

注16 『万葉集』『日本書紀』等の本文の引用・口語訳は『新編日本古典文学全集』小学館による。

注17 『古事記』では軽太子が伊予に流され、あとを追ってきた軽太郎女と心中したことになる。『日本書紀』では卜者によって「木梨軽太子、同母妹軽太郎皇女に奸けたまへり」と預され軽太郎皇女が伊予に流される。後に木梨軽太子は皇位継承の争いに敗れ、自害する。

『萬葉集』『日本書紀』等の本文の引用・口語訳は『新編日本古典文学全集』小学館による。